

# テオリアの真義と政治学

——アリストテレス認識論の新研究——

池 田 栄

## 目次

1. 緒論 (アリストテレスのテオリアとカタルシス)
2. テオリアについての概論
3. テオリアの真義

## Contents

1. Introduction (Aristotle's *theoria* and *catharsis*) in English
2. What *theoria* Means Otherwise.
3. What *theoria* Means to Me.

## 1 緒 論

estin oun<sup>1)</sup> tragōdia mimesis praxeos spoudatas kai teleias, mégēthos ekhouēsas, heduménō<sup>2)</sup> lógō<sup>3)</sup>, khoris hekástou<sup>4)</sup> tón eidón en tois moriois drōmōn kai ou di' appaggelias, di' eleou kai phōbou perainousa tēn tón toioútōn pathematōn katharsin.

——Aristotélēs, Peri poietikēs, 6.<sup>5)</sup>

テオリアの真義と政治学

四五

(訳文)  $\lambda\gamma\alpha\sigma$  悲劇 (n) *tragodia* とは厳粛なこと、一定の範圍のみの行動 (n) *praxis spoudaia kai teleia, mégethos ékhousa*; (n) *ékhōn, (f) ékhousa, (neu) ékhon* を美とする言 (n) *hélusménos lógos* や  $\epsilon\sigma\tau\epsilon\iota$  模倣する言 (n) *mimeisis* とある、この模倣は (劇の) 諸部にかゝる演出言 (*dráo = I perform*) 諸形相 (n) *tá eidēa* の各を離れ、叙述 (n) *apaggeilia* に  $\epsilon\sigma\tau\epsilon\iota$  と  $\alpha\sigma\theta\epsilon\nu\alpha$  同情 (n) *éleos, pity* と  $\epsilon\sigma\theta\epsilon\nu\alpha (n) *phóbos, fear* と  $\epsilon\sigma\theta\epsilon\nu\alpha$  のような諸情緒 (n) *tá toiaútā pathēmata* のカタルシス (n) *katharsis* を  $\epsilon\sigma\theta\epsilon\nu\alpha$  (*perainō = I accomplish*) と  $\epsilon\sigma\theta\epsilon\nu\alpha$  の模倣である。$

——プリストテラレス、作詩術について (詩論) 6 章。

- 1) 動詞 *ékho* (I have) の現在分詞 (*háwōn* 現在) の女性、単数、属格であり、從つてラエスの *práxeis* はかかる。
- 2) シキラー博士の註 (Dr. Edward Zeller, *Aristotle and the Earlier Peripatetics*, vol. II, p. 320, n. 4.) の  $\lambda\gamma\alpha\sigma$  種類の *hélusménos lógos—léxis* と  $\epsilon\sigma\theta\epsilon\nu\alpha$  *léxis = a diction, 語法; mélos = a song*.
- 3) 動詞現在分詞 (*performing* 現在) の中性、複数、属格とある、從つてラエスの *eidēa* とある。
- 4) 動詞現在分詞 (*accomplishing* 現在) の女性、単数、主格とある、從つてラエスの *mimesis* はかかる。
- 5) *De Arte Poetica* の書の名はギリシヤ語原名  $\rho\omicron\iota\epsilon\tau\iota\kappa\eta$  語名  $\rho\omicron\iota\epsilon\tau\iota\kappa\eta$  と「作詩術について」の意味をもちつゝゐる。以下「本文では「詩論」と略称する、*poetica ars* の他の用例——*poetice artis honos non erant* (Cato). (作詩術の尊重は存しなかつた)。
- 6) 著作者自身のこの訳文が、この若干を示す。  
 (従来の代表的和訳) (前述の事柄から定義を下げば)「トラキーディヤは然るべき大ききを持つてそれ自身完全、一つの莊重なる行動を模倣したものであり、快適な裝飾を施された言葉に依つて描かれ、各種の裝飾は、別別に、それぞれの場所にソウ入される。そしてそれは、叙述体でなく、俳優がそこに描かれたものを実行する形式に描かれる。そして哀れんと恐怖とを作興する出来事を含み、それを通じて、かような情緒のその(トラキーディヤ)カタルシスを行なう。  
 (従来の代表的和訳) 一定の広がりをもってそれだけでまとまりのある嚴肅な行動を、詩の各部に応じた美しいことばをもち、しかも叙述によつて、かく動作によつて模倣するものがあり、その目的は同情と恐怖とを通じ、このような情緒のカタルシスを行なうにある。(Langenscheid 文庫の和訳) Es ist also Tragödie Nachahmung einer Handlung würdig bedeutenden Inhalts und vollständig abgeschlossen Verlaufs, die einen bestimmten Umfang hat, in künstlerisch gewürzter Sprache, deren Würzen jede für sich in den verschiedenen Parteen der Tragödie zur Anwendung kommen, vorgeführt von gegenwärtig handelnden Personen und

nicht durch erzählenden Bericht, durch Mitleid und Furcht die Läuterung der Empfindungseindrücke dieser Art abschliesslich zu stande bringend.

(The writer would like to have this introduction to, for a résumé in English of this article.)

For aught I know to the contrary, hitherto there may have been no articles containing exhaustive *istoroiar* in the narrow sense about Aristotle's elusive words, *theoria* and *caharisis*, much less any written works criticising the above *istoroiar*. And but for the latter critique his erudition and strong memory, id est, his political and social knowledge including his extensive information about the positive law, in so far as it is narrated, would be nothing but the above *istoroiar*, not *éttarriam* different from *óósa*, though it is too much to say that his great learning narrated would be a farce. This is the reason why I should like to try to write the afore-mentioned *istoroiar* about Aristotle's two words, together with my own criticisms on the matters, in the present memoirs; hence my earnest wish that this work of mine would pertain to the epistemology or philosophical methodology in Aristotle's political science, to come out in new attire. And granted that my work really does so, "I believe," just as Grote does, "the supposition of a double doctrine to be mistaken in regard to Aristotle." Last but not least, I must write herein that *magistris pietatis causa hoc opusculum dedicat auctor.*

(1) George Grote は英國の銀行家であり、また著名なるギリシヤ史家。プリヌマテレーヌ著書に關する若干の注釈者はかれが「秘教的」(esotericós)、「公教的」(exotericós)の二種學說を殘したところだが、シロウチヤウの esotericós と同じく語はマニークィノス (Loukianos)

(120年頃——)の時代いぜんには用いられなかつたと論じ、*“I believe……(as quoted above); but it is true as to the Pythagoreans, and is not without some colour of truth even as to Plato.”* (Quoted in the Century Dictionary, “esoteric.”)と續けて記してゐる。

思ふに、プラトーンの「バイドーン」には別述のごときエレウシスの秘儀の際のテオリーアのごとが書かれ、ピュエタモラス (Puthagoras) 学派ではオルペウス (Orpheus) 教の影響を受けた秘教があり、ルーキアノスに於て esoterikos が始めて秘教的の義に用いられ、この意味で esoterikos akroatikos とも言われたが、akroatikos, akroamatikos (アタロアマイテイコス、アタロアマイテイコス) はともたゞ口授的の義であるが、秘教的の意はなく、アリストテレーヌは口授的講義を akroatikoi logoi と称したが、esoterikos を講義の区別に關して用ひなかつた。

## 2 テオリーアについての異説

アリストテレーヌのテオリーアについて従來の通説はこれをかれのいう「第1形相」たる神のなす観想——静観すなわち何物をも求めない無我の心境そのもの——と見る説であり、この説はかれの「第1哲学」第11編または「ニコマコス倫理学」第10編8を根拠とする。しかしこの説はこのテオリーアを人間のものとせず神のものとした点で誤りであることは後にテオリーアの真義そのものを論述するところに譲る。

つぎに上のごときテオリーアの通説的解釈を認める学者のうちには、このテオリーアを無条件的救済の信仰たるプロテスタンティズムと結合し、「アリストテレーヌへ帰れ」(Zurück zu Aristoteles) のスローガンのもとに「政治体系」論を主張する人人がある。この種の論者のうちにはアリストテレーヌの hori organikoi が機械論的因果のもとにあるすべての「諸事物」(ta pragmata) すなわち「あらゆる諸個物」(ta panta hekasta) を示すものであると主張し、またはアリストテレーヌの用いる susterna なる語もかかる意味の機械論的秩序を示す語であると強調し、あるが故に “nihil est in intellectu, quod non prius fuerit in sensu,” (非ず感覚のよみだなき

たものは知力のうちにない、) という有名なラテン文引用句をアリストテレスの命題と考え、かれのいわゆる「自然学」(phusikē akroasis) の対象たる「自然」(physis) や「諸自然物」(ta phusika) を機械論たる近代自然科学の対象と同一視して主張するものがある。

うえのごときは1種のプロテスタント的理神論(Deism)の主張である。すなわちうえの機械論的因果という相制(Interaction)たるsystem, Systemとこれをそのまま承認して信順する人間が無条件に救われることを神の世界計画(world plan, Weltplan)の実現と見、かつこの実現はその開始後には神の意思を離れると見る。<sup>1)</sup>この考はかつてレーゼ・フェール時代にその経済機構をもって神の「予定調和」(l'harmonie préétablie)<sup>2)</sup>として「窓のなす単子」(monade sans fenêtre)の学説と結合して説明したライブニツ(Leibniz)のプロテスタント的理神論に通う保守反動の神学であり、1種のadios logosである。

1) 今日のデンマークにはキエフケゴープ神学の国内影響が少ないとともに国民の大多数は少くとも形式的に国立教会(Folketrikke, フォルゲキアゲ)たるルーテル教会に属し、またプロテスタント教会のうちにかかる理神論を認め、デンマーク語でかかる相制をsystem(システム)と称し、かかる世界計画をverdensplan(ヴェルデンンプラン)と称するものがあることを1965年に知った。かれらはキエフケゴープのキリスト教神学に対して「再生」(Gjenkarnation, レネカルナスイオン)と「生命の客観的理解法」を主張してこれと対比する。なおシュレーアーのキエフケゴープ神学批判については自著「正統政治学」, xi頁、注1)参照。

2) いま2個の時計が精密に並行する場合、すなわち少しも差異なく時を知らずとすに、両者の並行運動の説明が1種の広義の並行説(parallelism)であるが、この並行説として、(1)時計師があらかじめ両者の間に因果関係あるよう工夫したとするものは相制説であり、(2)時計師があらかじめ両者をして別別に、しかも精密に並行運行を営むよう細工したとするものは予定調和説であり、(3)時計師が絶えず両者に干渉して並行運動を営まごめるとするものは、時計師がある機会に干渉するのが真の原因であるから、機会原因説(occasionalism, l'hypothèse des causes occasionnelles, Theorie der Gelegenheitsursache)である。(2)の予定調和説と(3)の機会原因説は相制説に対し並行説(狭義)ともいわれ、機会原因は「一般的に言えど、真の原因を知らざるものには偶因と見えることがある。宗教と関連して(1)と(2)は理神論となり、(3)は有神論(theism)となる。」

しかしこの種論者の解釈と異なり、アリストテレスの「有機体」(ho organikos, pl. hoi organikoí)と<sup>1)</sup>のちにも詳しく述べるごとく、「形相」(eidos, pl. eideá)のための「機関」(organon, pl. organa, 道具)であり、従って「有機体」とは目的論を前提にしての観念であり、またアリストテレスらの用いる sistema は、別述のごとく、一種の知的体系であり、論者のごとき意味は存しない。そのうえ“nihil est……”はアリストテレスの命題ではなく、ロック(Locke)の好んで用いたものであり、ロックはこれによってアリストテレスの認めた人間の潜在的生得観念たる phasis を否定している。<sup>2)</sup>

1) 自著、最高文芸としての正統政治学、14頁。本論文、五六頁、五七頁。

2) ライブニツ(Leibniz)はロックの命題にコロンを付し、“exipite: nisi ipse intellectus.”(ただし、知力そのものを除く。)と記して潜在的生得観念を有する知力を承認したごとく、アリストテレスはロックの命題をライブニツ的条件のもとに承認するものである。

なお無条件的救済の信仰は凡人意識のもと正義と愛の実践という努力なくしてはありえないにかかわらず、論者は徹底した現実主義を主張し、そのうえエリートの自覚をもって政治体系論をマクロ経済学と結合し、かかる新興科学上の必然の法則を発見したと自負する。かかる考えの政治家のうちは“*Ich bin ein Mann von Wort*,”(じこそば云わぬ、この男一匹にまかせろ)とうそぶきつひめその一面“*Geduld*”(忍耐)と“*niedrigende Weise*”(低姿勢)をスローガンとするものが出た。しかしこの“*Geduld*”と“*niedrigende Weise*”とはイギリス政治家がわれも凡人(plain man)、他も凡人として意識する friendly rivalry とは似て非なるものであり、(ハントラウ)“*Geduld*”と“*niedrigende Weise*”とがマインの諺にある“*Geduld überwindet alles*,”(忍耐がすべてを征服する)とか、“*Mit Geduld und Spucke fängt man eine Mücke*,”(忍耐と面従とで人なまをしようとめる)にうかがわれるものであり、従ってうその忍耐な polemós のためのものであり、harmonía と調

立しないものである。

- 1) 英語にも *Phonour bright* (驕り) という口語はあるが、そこには超人 (*Übermensch*) 意識やエリート意識なく、*“Deeds before words”* を尊ぶイギリス人はかかる強い表現を自ら進んで用いることを好まず、むしろ疑問に「大丈夫かい」の意味に用いることが多い。
- 2) この諺において *Speichel* (いばね) を用いず、俗語の *Spucke* を用い、通常に用いられる *Mücke* を避けてその代わりとして同意義の *Mucke* を用いた *Spuckchar* (a play on words) た *parody* (pun と区別せよ) のためである。js. *Speichel lecken* = ihm auf niedrigende Weise schmeicheln = to lick one's shoes = vorne lecken und hinten kratzen (面従腹背する)、従って *Spucke* (*Speichel*) とは日本語の「お杯を頂戴する」と異なり腹背という意味を持ち、従って日本語の「もみ手」とか関西方言の「おじゆを吸う」に当ると考へる。

以上においてアリストテレスのテオリアを神のなす観想と見る通説とこの通説に結合する政治体系論とを論評した。つぎに近代の実存主義者たちはアリストテレスの「形而上学」第11巻のテオリアについてこれは人間の行為であるとし、各個人の弁証法的行為であると解する。すなわちこの派の学者はアリストテレスが代、医を業とする家 (*oikos, family*) に生れたこと、かれの「詩論」(前出) でいうカタルシス (*katharsis*) をかれの「政治学」(後述) では医療としてのカタルシス(排セツ、*purgation*) にたとえたこと<sup>1)</sup> などからかれのカタルシスをフロイト (*Freud*) 的意義のカタルシスと解する。すなわちかれの有名な、上記の「悲劇」の定義においてかれが「このような諸情緒」と記しているのを *oppressive moods* である同所の「同情」(*éleos*) と「恐怖」(*phobos*) と解し、これらの *moods* の圧迫により性欲を中心とする諸欲情 (*órexais, sing. órexis*) に生じた心のシヨリを言行によって外へ排セツするのがかれのいう、悲劇の効果たるカタルシスであると解し、かかる解釈の結果、かれのテオリアにうえのごとき実存主義的解釈を下す。なおかかる論者のうちにはカタルシスにレッシン (*Lessing*)<sup>2)</sup> 的道德的解釈を与えるのはカニが甲らに合わせて穴を掘るに等しいと高所に立って冷笑するも

のもある。

1) Politikh, 8: 7.

2) その傑作「賢人ナータン」(Nathan der Weise)のうちの物語り—ユダヤ教とキリスト教と回教といずれが正しいかとの回教国王の問いに對し、ナータンは次の物語りをした。昔、ある家で、愛の力のある蛋白石(Onix)の指輪1個を最愛の子に与えて家宝として伝えるシキタリが始められていたが、3人の子を等しく愛する親がイミテーション2個を作り、わからぬようにして3人の子にいずれも真物と称して与えた。これの真偽が法廷で争われたとき定めかねた裁判官は清らかな愛を求め競争せよ、それに勝ったものが真の石を持つと判決した。この物語りを聞いた回教国王はナータンに友になってくれと頼んだ。この物語り中にある蛋白石は誕生石(Birthstone)——1月のザクロ石(Garnet)に始まる——のうち10月のそれである。これを持つものに幸運をもたらすと信ぜられた。

なおうえの実存主義者のうちいっそう深い研究をなすものはアリストテレース(384—322)直前のギリシヤ悲劇詩人エウリピデース(Euripides)<sup>1)</sup>(480—406)が人間の運命をまったくの偶然と考え、その結果うえのごとき徹底した個人主義的実存主義の方向へ大いに向ったが、このエウリピデースの考えを実存主義の面で徹底せしめたのが、アリストテレースの上述のごとき実存主義であると主張する。

1) 自著、最高文芸としての正統政治学、24頁。

これを説明するに、そもそも「運命の皮肉(じたずめ)」(the irony [whim] of fate)——好運・不運を含み、悲劇の場合は tragic irony——という語は日本語の「合縁奇縁」が広義において意味するものに当るが、古代ギリシヤの弁神論(theodicy)いぜんにおいてはこの「運命の皮肉」を弁神論(thesis)すなわち機械論的因果と解し、このテミスは神をも拘束すると考えた。しかるにこの「運命の皮肉」を弁神論の立場から説明するのは至難の1つであり、そのうち「偶然」と見える運命についてこれを“casus providentiae”<sup>1)</sup>と見る哲学者も出たが、エウリピデースはこれをもってまったくの偶然——古代ギリシヤではテュケー(rúke)を広義の運命よりもこのまったく



の偶然の意味に用いる場合が多い——と解し、かかる運命が人間をも神をも支配している結果、神も人も正義と愛のカットウに悩むものであることをかれの作品たる「メーディア」(Médée)<sup>2)</sup>や「エレクトラ」(Elektra)<sup>3)</sup>に描いて、徹底した実存主義そのものをはっきりと主張したといえないにしても、大いにこの主義に向ったこととは明白である。

- 1) 自著、最高文芸としての正統政治学、82頁。
- 2) 「メーディア」夫の背信から、わが子どもたちまで殺す母を描く。これは近代にいたり Delacroix の作品「狂えるメーディア」(Médée furieuse) という名画を生じた。
- 3) 「エレクトラ」父の仇をうつため兄弟 (Brother) をして母を殺さしめる女性の行動とこの母殺しをすすめたアポロ神の態度に大いに疑問を示す作品。近代の精神分析学が Electra complex なる称を認めるのはこの作品の影響。
- 4) イギリスの小説家 Thomas Hardy は運命の皮肉のうち「偶然」と見える運命を盲目的な宇宙意志の支配たるまったくの偶然と解する結果、徹底した個人主義的実存主義を主張し、sex の解放を強調した。その代表作、Tess of the D'Urbervilles (1891)。この Tess はその後作 Jude (1896) とともにその当時、ヨ論の激しい非難をうけたのでそれ以後は詩作に転じ、ナポレオン戦争を主題とした大作叙事詩劇 The Dynasts (1906) を残し、この巨編による世界的名声によって O. M. を得た。ハーディの運命観はギリシャ語のアテー (ate)——神神の盲目的な支配を意味する——を連想せしめる。  
なおハーディの当時、Tennyson (1809-92) は夫婦愛を美しい道徳として強調し、Wordsworth (自著、英国刑事公民政治史序説、付録、19、20頁) に繼いで桂冠詩人に任ぜられた (1850-52)。このワーズワスは晩年は神と国法を尊重する思想家としてヨ論の絶大な支持を受けていた。  
最後に、まったくの偶然を認める運命観を東洋に求めると、「因果」(インゴウ、hetu-karna) または「四柱」という遠因が「縁」(Pratyaya) または他の機会と合するとき、まったく偶然に生じる結果を認めるバラモンのまたは中国的な運命観があり、いまなおわが国における封建思想の核心をなしている。

近代の実存主義者たちはアリストテレスのテオリアをかれのカタルシスとの関係でうえのごとく論述する。これを論評するに、まずこの派の学者がテオリアを神のものと考えずに人間のものと考えたことは、後に論ず

るごとく正しい。

つぎにこの派の学者たちがアリストテレスが医家に生れたことなどの上述の理由でかれのいわゆるカタルシスなる語の意味を離れてかれのテオリーアを解しえないとするのも正しい。しかしそれを理由としてテオリーアをうえのごとく解するのは早計であり、このことは後に論述する。

つぎにこの派の学者たちはアリストテレスが正義や愛を主張したことをかならずしも否定するものではなからう。しかしアリストテレスが道徳上の主張をした事実を認めるものたちもかれがこの主張をしたのはかれのいわゆる通俗講演 (*exoterikos*, pl. *exoterikoi*) においてであつて、かれのいわゆる口授講演 (タジューウエン、アクロアーティコス、*akroatikos*, pl. *akroatikoi*) においてでなからう、かれについて *double doctrine* 説を採用する。アリストテレスがうえのごとき名称をもつて2種の講演を行ったことは真実であるが、かれが *double doctrine* を有したと考へがたいことはかれのテオリーアとカタルシスについての正しい理解によって明らかとなる。

なお一部の学者がエウリピデースについてうえのごとく主張するところはアリストテレスとの関連を離れては正しい。しかしアリストテレスのテオリーアの意義が論者の主張するがごときものでないとすれば、論者がアリストテレスがエウリピデースの思想を実存主義的に徹底せしめたとするは早計である。むしろアリストテレスの詩および劇に関する思想は当時の悲劇作家の思想と通じるものがある。しかしそれはソポクレスのそれと通じるのであり、このことは後に述べる。

### 3 テオーリアの真義

以上においてアリストテレースのテオーリアに関する従来の諸種の解釈を述べ、いずれも正しくないむねを論述した。しからばこのテオーリアの真義は何ぞや。

思うに近代の実存主義者たちがアリストテレースが医家に生れたことなどの理由で、かれのいわゆるカタルシスの意義を離れ、かれのテオーリアの意義を解しえないとするは、すでに述べたごとく、そこまでは正しい。しかしかれらの理解するかれのいわゆるカタルシスの意義は正しくない。しからばこのカタルシスの正しい意義は何であろうか。

このカタルシスにつきアリストテレースはわたくしの本論述にすでに引用した「悲劇」の定義<sup>1)</sup>において記述する。その正確なる意義を知るためにはこのギリシャ語本文を読むとともにアリストテレースの認める芸術の意義を知らなければならない。

1) 本論文、四五頁。

まずかれの認める芸術とは自然物に関するものである。かれは「事物」(tò prágma, pl. tà prágmata)を分けて「神」(theós)すなわち「第1形相」(prōton eidos)と「個物」(tò hekaston, pl. tà hékasta)となし、さらに「個物」を「自然物」(tò phusikón, pl. tà phusiká)と「人工物」(tò plástōn?, pl. tà plástá)の2に分け、なおまた「自然物」を「有機体」(ho organikós, pl. hoi organikoi)と「第1質料」(proté hulé, —ヒューレ, pl. prótai hulai, —ヒューラン)に分ける。

1) 自著、最高文芸としての正統政治学、109頁。

つぎにアリストテレースによれば、芸術とはうえの「自然物」に一部隠され一部示された「形相」を模倣する意味での「模倣(ミームーシス)の術(テクネー)」である。この「形相」は「諸事物の自然」(phusis pragmatōn, natura rerum)とも称せられ、あらゆる「事物」に内在し、ただ「第1質料」にのみ内在しない。従って「形相」は「人工物」もこれを有している。「人工物」における「変化」(metabolē)<sup>2)</sup>・「変動」(kinesis, 運動)<sup>3)</sup>を含む「生長」(gēnesis)<sup>4)</sup>の「4原理」(tēttares arkhai, sing. arkhē) = 「4原因」(tēttares aítai, sing. aítia、テイアー)として①「質料」・②「形相」・③「変動原理」(arkhē tes kinēseōs)・④「目的因」(tò hou hēn-eka)を挙げている。これを家屋にたとえると、そのデザインは「形相」であり、大工などの働きは「変動原理」であり、木材または鉄筋などは「質料」であり、その家屋内に居住しようとする目的が「目的因」である。従ってこの場合の「形相」は「自然物」の形相とちがって生物進化的な再生(palingenesis)上の主体たる厳密な意味の「実体」<sup>5)</sup>ではない。

1) 自著、最高文芸としての正統政治学、109頁。

2) 3) 4) 「変化」ほ「変動」のほか生滅をも含み、「変動」は「生長」のほか「必然」(後述)などを含む。なお「変動」・「生長」については前掲自著、14頁、15頁参照。 5) 前掲自著、14頁。

芸術とはうえのごとき、「人工物」の「形相」を模倣する術ではなく、「自然物」の「形相」を模倣する術であり、しかも「自然物」中の「第1質料」は「形相」を有しないから、芸術とは「有機体」の「形相」を模倣する術である。従ってこの「形相」は上述のごとき「実体」<sup>1)</sup>であり、「有機体」とは「形相」のための「機関」と

してその意味で「有機体」と名付けられ、従って「有機体」はそれ自身の目的と自由を有していて、この自由は人間においても進化する。

1) 「普通のなもの、すべてに存する一般的なもの」(to katholikón, to epi pási koinón)

以上のごとき意味でアリストテレスは目的論的宇宙観を有した。とはいえかれが機械論をぜんぜん認めなかったというのではない。かれは例外ではあるが、機械論的因果とまったく偶然なものを認めた。この点でかれはデモクリトス (Demokritos) を多少とも継承するものであった。そもそもプラトーンは完全な目的論を主張したが、デモクリトスは唯物論を主張して「アトム」(to átomon, pl. tà átoma)と「空虚」(to kénon)を認め、かれのいわゆる「必然」(anághgē, マンナー)の称のもとに機械論的因果を認めた。アリストテレスも、例外的ではあるが、「第1質料」の「変動」については前述の「生長」を認めず、この「必然」という「変動」を認め、また「まったく偶然なもの」(to sunbebékón, contingency, to automaton)を認めた。かれのこの例外についての主張をもってまったくの欠点となすある学者は「第1質料」は実際は存しないという<sup>3)</sup>。しかもっとも進んだ新興物理学でもそのいわゆる巨視的現象において機械論を否定しないのを見ると、アリストテレスのうえの例外についての主張をまったくの誤りとなすをえないであろう。

1) a chance event の意味 (ἀνάγκη) の意味 (ἐξ αὐτοῦ pl. tà sunbebéká)

2) Phusiká, 2: 4, 1. しかし「アリストテレスは他の書 (Metá phusiká, 11. 3, 2) にて techné に対し empeiria (単なる経験) の意味に用いてゐる。

3) 波多野精一、西洋哲学史要、76頁。

つぎにアリストテレスによれば、芸術は「第1形相」の模倣ではなく、「自然物」の「形相」の模倣である

がゆえに、芸術の対象が人間である場合、その人間はうえのごとく自由であるとともに運命の支配を受けるとせられる。しかもこの運命は、かれの *he phusis poiēti* の語の意味から見ても、*moira*<sup>2)</sup>——正義と愛による神の摂理——であり、従って運命の皮肉(前述)は広義の *casus providentiae* である。これに反して徹底した個人主義の実存主義を主張するものは、運命をまったくの偶然と解する場合が多いが、実存的個人はその主体性(*Subjektivität*) のためいかなる意味の運命の支配を受けまいと主張する。

1) 自著、最高文芸としての正統政治学、18頁。

2) *moira* (モイラ) Ⅱの語は *motion* (部分) と関係があり、本文の意味では *kósmos* (コスモス) —— *kháos* に対して宇宙の意思する——であり、かつ道徳的秩序。 *moirion* は本論文中に引用された、アリストテレスの悲劇の定義中にも用いられる。

アリストテレスの上述のごとき芸術観はかれの直前の悲劇作家ソポクレス (*Sophokles*) (前496 p 495 p — 406) を連想せしめる。後者はその作品において人間の偉大なる性格がそのカタストロフィー (*katastrophēh, catastrophe*) の際にもよく持ちこたえ、そこに崇高美 (*the sublime*) とつづの悲壮美 (*the tragic*) があはれられた。しかもかれはこの運命の皮肉をエウリピデースのごとくテューケーと見ず、*moira* による *casus providentiae* と見、悲劇の主人公がその偉大なる性格にもかかわらず、他面においてそのヒュウ慢 (*Huberphania, arrogance*)<sup>1)</sup> のためあくまで運命に抗しようとしてそこに自己の破滅を招いたと考える。かれの大作「オイディプス王」<sup>2)</sup> が有名である。しかしそこにはフロイト (*Freud*) のいう「エーディプス=コンプレックス」 (*Ödipus-komplex*) が主張されていながら、そのなまはらうたてである。

1) ノラト語 *rahah* と関係する *ra-er* (*róhna*) は *pride* と訳さ、*ra-er* の例にならば *arrogance* を意味する。

and *pride* (*róhna*) goes before *mistortune* (*Proverbs, 16: 18*) (Translation by Lamsa).

Thou hast humbled the proud (rahab) as those that are slain (Psalms, 89 : 10) (Lamsa, Old Testament Light, p. 514).  
Blessed are the poor in pride (rôkha), for..... (Matt. 5 : 3) (Tr. by Lamsa).

Conf. (Sk) māna.

2) ソボクレス作「オイディプス王」(Oedipous tyrannos)のレジュメーギリシヤの都市国家テーバイでオイディプスの実父なる王は誤った神託なるものを信じ、かれを殺すためにかれを捨てた。かれは後にこの父を知らずして殺し、さらにスフィンクス (The Sphinx) がうえるテーバイ (Thebai)でそのナンをもつて長い間ひとびとを苦しめていたに對し、このナンを解いてこれを自殺せしめ、この功績により、かれは王位と王妃を得た。この王妃はかれの実母であったが、それを知らずして婚し、その間に2男2女を設けた。かれはテーバイの国王 (tyrannos, 語は king の意)として仁慈の明君と仰がれた。この明君に父殺し (patricide) と近親相姦 (incest) の事実あるは、かれが知らずして行つたとはいへ、まさに運命の皮肉であり、この悲劇的皮肉は casus providentiae と解すべきであり、父王の暴挙と自ら発案しなかつたとは云え、この暴挙を止めなかつた母とサ細なことからの怒りで殺人をするオイディプスに對する神の摂理が考えられるべきである。このモイラには抗すべきでない。しかるにオイディプスはスフィンクスのナンを解くほどの賢明さに自負して慢心し、この尊大ゆえに、父の命で自分を捨てに行つた召し使ひをして恐るべき事実のすべてを無理やりに告げしめた。これ「摂理たる偶然」にあくまで抗するものであり、その結果は母をして自殺せしめ、自らは両眼をえぐり出すに至つた。なおうえるテーバイはギリシヤのテーバイで、エジプトのテーバイではなく、ギリシヤのスフィンクスは翼ある女子で、エジプトのそれは、一般に知られるごとく、男子である。

以上においてアリストテレスの芸術觀を述べた。この考えを背景にしてかれの「悲劇」の定義をそのギリシヤ語原文で読むとき、芸術の1つとしてのかれの「悲劇」の定義とかれのいわゆるカタルシスの真義を知ることが出来る。すなわちこの原文には *ta eideta* の格的变化形が記せられていること、かつこのギリシヤ語はここでは普通語としての姿とか形とか形式とかの意味を持たず、かれの哲学上の重要な觀念たる「諸形相」を意味する語であることをまず第1に注意しなければならぬ。すでに示された従来の代表的和訳はこの点をミスしている。わたくしがこの点を発見し、前掲の新和訳文を田中秀央博士にお送りしてご叱正を乞うや、これをまったく是認するご返信を賜つた。

1) 「前略御免 貴訳で全く結構と存じ候……: *Festina Lente* 昭和四十年八月十四日午後八時 田中秀央」(封書)

「しからば和訳に限らず従来のことキミスある英独仏訳文は、多くの場合、ギリシヤ語文よりの訳本または重訳本からなむに翻訳したか、あるはギリシヤ語本より訳するも A° によりち apogr. によつたためあり、[A°] khōris hekástou ㄆ [apogr.] khōris hekástō' と変む。この場合 hekástou は属格であるがゆえにその前の khōris (原形 khōris) は前置詞——without——ひきゝ hekástō' は与格であるからその前の khōris は副詞——separately——ひきゝ。この A° = [L] Archetypum は現在あるギリシヤ語本中最古のもので最も権威があり、apogr. = [L] apographum, pl. apographa はルネサンス時代に成立した A° の写本またはその重写本である。ロウブ (Loeb) 文庫本をホルダー (Hardy) は apogr. の与格を英語または仏語に訳出しているが、われわれは、ツェラー (Zeller) のように、A° の属格を原文と認めるのを正当とする。

1) 新約聖書が原アラム語 (Aramaic, Syriac) からギリシヤ語に訳せられて、第 8 世紀にプリストテレスの「詩論」がある 1 つのギリシヤ語稿本からアラム語に訳せられ、これから第 11 世紀にアラビヤ語に重訳せられ、うえのアラム語本は今日ごく僅かな断片だけ (1 頁) 残っている。右のギリシヤ語訳聖書にはリユーマチスの意味でかかれた原アラム語聖書 (ルカ伝 13: 11) のルーン (tokna) を「ネウマ (oneuma, 霊) と誤訳したり、同書 (マタイ伝 19: 24) の gamla (籠) を kámeios (ラクダ、単数、対格 kameleon) と誤訳したりしてゐるのを見るは訳者はギリシヤ人らしい。うえの「詩論」も、もしギリシヤ人によってアラム語に訳せられ、かつ、ギリシヤ語原本より訳せられたとするも、そこにはなお原ギリシヤ語につきギリシヤ人らしいミスチック——例えは意味の通じるばあい前置詞を副詞たり、名詞の格を誤解するなど——があつた可能性がある。

- 2) archetypum = an original. apographum = a copy. など apogr. なども一般に認められる略字。
- 3) セイムス・ロウブ (米) ニン (英) ヲーン (—1933)。米国の銀行家として法學 (LL. D.)。1912 年、有名な古典対訳文庫を創設した。

なお「悲劇」の定義に「叙述によってでなく」とあるは、著者がうえの書、第 3 章において芸術は、いかなる形式によって模倣せられるかについて、「叙述」によって模倣されるべきは詩であり、drân (= to perform, 現



在(複数)することによって模倣されることをば *to drama* (*pl. tà dramata*) (演劇) であるという意味を記してゐるによつて理解される。わが国の訳者にはこの *drama* を「戯曲」と訳するものがあるが、英語の *a drama, dramas* には①演劇の脚本 (*a scenaréo pl. scenari*) となつた戯曲と②演劇 (*a dramatic performance, a play; pl. 略*) そのものの二つの意義があるが、*drama* には戯曲の意味はない。

しかるに一方プラトーン (*Plátón*) の悲劇観を伺うと、詩人によれば神神は人間に罪を作らせてこれを罰し、この処罰が「悲劇」であるから「悲劇」は害があるとし、<sup>1)</sup> さらにかれば、實在の意識なく現実のみを写す詩人・絵かきを国家より追放すべきを主張した。<sup>2)</sup> しかればアリストテレスのうへの「悲劇」観はプラトーンのそれを継ぐものでなく上述のソポクレスのそれを継承して厳密なる哲学的定義を下すものであらう。<sup>3)</sup>

- 1) *Politeia*, 2. 2) 自著、最高文芸としての正統政治学、108頁。
- 3) ソポクレスの悲劇においてはユウ慢な性格がいかなる運命をも破ろうとして破滅に陥り、シェイクスピア (*Shakespeare*) の *Macbeth* の場合は同じ性格が大野心という形で自己に都合がよいと信ぜられる運命をあくまで利用しようとしてカタストロフィーに陥る。ともにそこには崇高美(既述)たる悲壯美がある。

なおわが能楽にも悲劇が多い。しかし *Aston* などの西洋人批評家は能楽によつて神への崇敬 (*adoration*) の念を起すことも演劇としては価値が少ないといふ。しかしこの評は能のユニークな長所である「幽玄」(*yūgenism*) を軽視してゐる。この「幽玄」は世阿弥(セアミ)のいうものであり、「わび」「さび」の義の「幽玄」と区別され(自著、正統政治学、102頁)、普通、それは優美 (*the grace*) と風雅(典雅 *the elegance*) の二つの美を並存すると説明され(高須芳次郎、古代中世日本文学十二講、422頁) ヨーロンの文学には *バダッホサ* (*patience*) や華麗 (*splendour*) はあるけれども「幽玄」は少ないといわれる(優美、風雅その他の美の説明については、自著、王冠の政治学的意義、第8版、78頁以下参照)。わたくしは能研究から見るとこの「幽玄」にはなおその背後に崇高 (*the sublime*) を持つていてその意味で地上における最高の美と考へる。しかもこの美を観阿弥(カンナミ)、世阿弥が有神論 (*theism*) における神の摂理としての因果応報の理の象徴としたが、かれらがこの因果の理をバラモン教に由来する、*じめつぱい* 暗業 (*mon karma*) と解せず、幽玄美の摂理と解したことは観、世、音の三阿弥の名にもうかがわれる。しからは能には西洋の悲劇に見る崇高美・悲壯美——時に背後に優美もある、つねに風雅を欠く——はないが、後者が幽玄に乏しいのはその大なる欠点であらう。これを換言すれば、旋律について、西洋



- 2) 本論文、五七頁、前の注1)  
 3) 本論文、四六頁、注2)

なお「詩は歴史にまらぬ」といううえの有名なことばはいっけん背理に見えて深く理解するときには永遠の真理であり、そのゆえに有名であるに価する。思うにアリストテレスよりすこし前までの詩は単なる觀念でもよかつたが、かれのいう詩は觀念と區別される實在の知識であり、それは芸術としてその實在の「有機体」としての「形相」を伝えるのが主たる目的である。しかるにかれのうえに言う「歴史」とは狭義の *historia* であり、かれの当時、広義のヒストリアとは存在に関する、探究 (*historia*) の結果たる知識であり、いまだ真知たる自然学 (*phusiká*) ををなさないが、俗見 (*doxa*) と區別されるものであり、この広義のヒストリアはアリストテレスの著たる10編の題名たる「諸動物についての諸ヒストリア」(動物誌) (*Peri tà zôia historiai, De animalibus historiae*)<sup>1)</sup> のうちにも用いられる。これに対し狭義のヒストリアは人事に関する記述のうち狭義の *poiesis* (別述) と區別されるものであるベルンハイム (Bernheim) のいわゆる物語り風歴史 (*erzählende Geschichte*)——史実に批判的取捨を加えず、興味本位に集録したもの——に当る。しかればこの広義のヒストリアはドイツ語の、広義の *Realien*<sup>2)</sup> にまつたぐ当るものであるが、狭義のヒストリアはドイツ語の、狭義の *Realien*<sup>3)</sup> に当ることが多いといふべき。

- 1) 生物学の資料となる事実の集まりである。書名のギリシヤ語 *perí* は対格を、ラテン語 *de* は奪格を支配する。従ってギリシヤ語原書名から見て *De historia animalium* (諸動物のヒストリアについて) の義) の訳名よりも、*Peri* に示す訳名の方が文法的に見て原名に近い忠実である。
- 2) 広義の *Realien* とは「科学のミナホヤたる諸対象」(*die Gegenstände als Quellen der Wissenschaft*) *Peri* の用例、*Die Funde der Spatenforschung sind die einzigen R. für die älteste Geschichte.* (Der Sprach-Brockhaus 1958.)。Spatenforschung 是發掘

掘による先史学。 field archaeology.

なおメンンハイムはギリシヤ語の広義のヒストリアに当るものとして「ドイツ語の „Geschichte“ を挙げてゐる(Bernheim, Einführung in die Geschichtswissenschaft, S. 1)」。わたたくしはこのドイツ語よりもむしろ広義の Reichen を挙げた。

3) 狭義の Reichen は通常、語学 (Sprachkunde) に対し、語学研究の資料たる「この語を語る民族の風俗・習慣などの集録を言つ、 Sprachkunde に対し Sachkenntnis (風物誌) とも言ふ。この狭義の Reichen は [ML] realia と同じく、その意味で英語のうちでも使われる。

うゑの狭義のヒストリアについては、その代表的作家でキケロらしい「歴史の父」(the Father of history)と称せられるヘーロドトス (Herodotos) はソポクレスとも親交があり、人間のゴウ慢がゆっくりとではあるがその結果として神の処罰を招くという思想を有し、この思想に基づきペルシヤハギリシヤ戦争を主題とする9編の大著「諸探究」(歴史、Historia) を著わし、「東洋的専制とギリシヤ的立憲の間の争闘」(a struggle between Oriental autocracy and Hellenistic constitutionalism) によりギリシヤが「自由のため……オリエント主義の洪水を巻き返した」(for the cause of freedom……rolled back the flood of Orientalism)<sup>2)</sup>と云ふことを後年に伝えようとし、この書のなかにも「神はあらゆる尊大なものを制することを好む」(philiei gar ho theos ta hyperékhonta pánta kolouéin,<sup>3)</sup> という有名な句を残したが、かれのこの大著も要するに物語り風歴史といふものではなかつた。なお古代のエジプト人・アッシリヤ人・シナ人等の間にもそれまでの人事に関する記録はあったが、いずれも物語り風歴史であり、ヘーロドトスの書とほぼ同時代に孔子の編集した魯 (Lü) の記録たる「春秋」にも孔子の史観はうかがわれるけれども、記録そのものは物語り風歴史であつた。

1) Everyman's Encyclopaedia, New 1958 Ed., "History."

2) Harnsworth's Universal Encyclopaedia, "History." ヘルシヤ戦争はあくまで正義 (asha, フシヤ) を強調する、排他的ではあるが、

高度に倫理的なマツダ教 (Mazdaism) を奉ずるペルシヤと常識的な愛と正義に従い調和を重んじるギリシヤとの戦い。

3) Historia, 7: 10. 同書のはじめの序文には「この書は人間の功業が年処を経て消滅しないように、ギリシヤ人と異邦人 (hoi barbaroi) とによつてそれぞれ示された偉業の声誉を永く滅さないため、そしてなせその間に戦争の起ったかを他に伝えるためにハリカルナッソス (Halikarnassos) のヘーロドトスが探求 (ヒストリア) の結果を公にするものである。」と記し、同書, 1: 87. にも歴史に対する神の干渉を記してゐる。なお hoi barbaroi という語はもともとギリシヤ人に対する異邦人 (ギリシヤ語を日常かたらない人) を意味し、ペルシヤ戦争後、野蛮人の義が amatheis kai barbaros などと称せられたが、「異邦人びいき」と称せられたヘーロドトスは hoi barbaroi を「こにも異邦人——ギリシヤ語の新約聖書では自国民いがいの異邦人を ta ethne といった——の意味で用いている。」

なおまたヘーロドトス (註484 p. 424 p.) 当時もつとも科学的な方法を歴史研究法にとり入れ、その点でもつとも進んだトゥキディデース (Thukydides) (註471 p. 401) の研究は個人の心理的動機に偏し、それより深く掘り下げず、従つて社会進化との関係を見ず、ドン・キホーテ的失敗を無視する。ゆえにかれの研究はペルシヤの認めるごとく1種の「実用的歴史」(pragmatische G.) であり、この「実用的歴史」は一般に個人の心理的動機に偏してゐた。<sup>1)</sup>

1) „ Sie fasst einseitig die psychologischen Beweggründe ins Auge;.....“ (Prof. Dr. E. Bernheim, Einleitung in die Geschichtswissenschaft, S. 9)

かくてつねの「詩は歴史よりもより以上に哲学的であり、より以上にすぐれている。そのわけは詩こそより多く普遍的諸法則を語り、歴史は個個の諸事実を語るからである。」はきょうもあすも正当であらう。しかしこのことはむしろアリストテレスの思想から推論すれば歴史学が否定されているといふことではない。神の摂理に關しヘーロドトスの認める真理を人間のエイドス実現に關して強調する「發展史」(entwickelnde G.) (ペルシヤム) は、アリストテレスの方法論から見て、その政治学の「根底」(root, Seeley) と思われるが、それを発表してはいないのはいまだその時期に至らなかつたのである。またこの種の「發展史」がもしアリストテレス当

時に存していたとすれば、アリストテレースはこの種の歴史によるカタルシスを悲劇によるそれとともに、否それ以上に、認めたと信ぜられる。しかもこの療法が同類療法として認められているから、われらはかれの政治学によって一応の民主主義的精神の健全を保障するとともに、学問的にかれの意を今日に体する意味で、うえのとき「発展史」としての政治史を抗源 (anigen) として、何らかの専制政治を固執する精神的ノイローゼ——このノイローゼは人間的ゴウ慢に由来する——への強い抗体 (antibody) を作って民主主義的精神の健全を確保する方向へいっそうの努力をしなければならぬ。しかるに古来「理性は恐怖に対する薬」(pharmakon phóbou logos) と言う。うえのとき政治史は、悲劇と同じくまたはそれ以上に、悲劇の主人公たる正善の士に対する同情と運命の皮肉に対する、既述のとき恐怖を引き起こすが、この恐怖は同情が強いほど大であり、この恐怖が抗源となつてわれらの理性に抗体ができ、カタルシスが行われる。さればその意味で理性は恐怖に対する薬であると言えぬ。

1) 歴史の科層的認識の困難からして、それを科学その他の学問と見るよりもむしろ芸術と見る努力がローマ時代の「実用的歴史」(grammatische Geschichte) 学者たるギリシヤ人ポリュビオス (Polybios) によつて始められ、その結果、ローマ時代の歴史研究によつて言えぬ「言語学と修辭学の両者の間にあつて実用的目的の諸記録は、百科全書的書物と学校用書を含めて、漸次に極貧のみすぼらしさに成りさがつた」(… zwischen beiden, der Philologie und der Rhetorik, gingen die Aufzeichnungen zu praktischen Zwecken, die encyclopädischen und Schulbücher mit eingeschlossen, allmählig bis zur armseligsten Dürftigkeit hinab. Prof. Johann Gustav Droysen, Grundriss der Historik, S. 76.)

近代に入つて歴史を芸術から学問の領域へ取り戻すためにハックル (Thomas Buckle) が方法論として科学的研究方法による自然科学的法則の発見を主張したに對し、ドローゼンが史料による探求 (Historia) について方法論として一種の直觀的研究方法による狹義的法則ならびに部分的な狹義の範ちゅうの発見を主張し、ハックルならびに歴史研究はむしろ科学として日進月歩の進歩をなした。これに反しドローゼンの研究方法はウィンデルバント (Windelband) やリッケルト (Rickert) の汎西南ドイツ学派 (die südwest-deutsche Schule) によつて継承されたが、リッケルトの「個性記述的」(ideographisch) なものと「法則定立的」(nomothetisch) なものと

のと區別し、歴史研究の目的たる認識の対象 (der Gegenstand der Erkenntnis) から實在的な対象 (客観) を、従つて存在 (sein) する、広義の法則を駆逐し、観念的な対象 (客観) たる、妥当 (gelten) する価値 (Wert) を認識の対象とした。

つきに科学としての歴史学の成立について論ずれば、その科学性のうち技術的研究方法に關してそれはすでに精密科学の域に達していると言つて過言ではなからう。歴史学の対象論すなわち史観の問題とする広義の歴史の範ちゅう (広義の歴史的法則) がカント学派のいうがごとき先驗的範ちゅうと區別されることは一般に認められるも、この範ちゅうが狭義の法則 (Gesetz) かまたは範ちゅう (Kategorie, Kategorie) たるかについて今なお問題が存し、トールチン (Troeltsch) (1923) が「歴史学 (ヒストリー) の危機」(Krisis der Historie) を叫んだときはむろん、量子論の発展に伴なう1925年の不確定性原理などによりカントの範ちゅうたる因果の崩壊が顯著となつた (自著「正統政治学」11頁) (なお1936年に体系化された、オパーリン (Oparin) の生命の起原に關する自然発生 (spontaneous generation) 説——光合成 (photosynthesis) による綠色植物の自然発生を認める——は「すべての細胞は細胞から」(omnis cellula e cellula) の原則を破り、この点で巨視現象における機械論的因果を否定する1の仮説となつたが、1955年6月29日「ワシントンに於ける発表によれば、イリノイ大 (the University of Illinois) の米・英・日共同実験 (the American-British-Japanese experiment) において、RNA) を用ひ、生命合成 (life synthesis) が成功したとせられる」といふこともなおうえの問題が存し、もし歴史の範ちゅうが狭義の法則に近いものとなれば、それは哲學的範ちゅうに近いものとなる。もしわれわれがアリストテレスの進化論的政治学から推論すれば、歴史の範ちゅうは人間社会におけるものであり、そのうち人間意思の自由に關する自然発生 (parallelism) である。しかるにこの並行を機會原因説 (有神論) または偶然原因論 (casualism) で説明するか、または予定調和説 (理神論) で説くかについては今日なお後・量子論的な未決の問題である。(ダーウィンの進化論も一種の偶然原因論。)

とほごえ、英国では政治学はシリーゼンからまず英国憲法史 (English constitutional history) をのちに万国政治史 (the world political history) を帰納的材料となせり立派に政治科学 (political science) として成立し、もはや単なる政治政策学 (public policy as a science, Politik als Wissenschaft) ではない。ただシリーゼンとそれ以前では狭義の法則に近いものを歴史の範ちゅうと考えた (Sealey, Introduction to Political Science, p. 6, p. 22 et seq., Expansion of England) 今日もなお、この考えが大にであるが、それととほごうえの「進化」という狭義の歴史の範ちゅうを認められ、あごは究極的な世界國家が予想され (Wells) 、あごは諸文明 (Civilizations) 、世界國家、究極的な世界國家が予想され (A. J. Toynbee) 。

つきにアリストテレスのカタルシスの道徳的意義について間接証拠となるものはつぎの諸事実である。

カタルシス (Katharsis) という語はアリストテレスいぜんよりすでに用いられ、ピュータゴラス (Pythagoras)

学派およびプラトーンは死によつて靈魂が肉体の束縛たる物欲より解放せられることをこの語で示し「プラトーン」<sup>1)</sup>、「パイドーン」(Phaidon)「クセノフーン」(Xenophon)は ho katharós (the clean) という語と同じ意味を示し、アリストテレースより後の新プラトーン学派のプローティノス (Plotinos)——「ピロン」(Philon)<sup>2)</sup>の流れをくむ——は死によらずして靈魂が肉体の束縛たる物欲より解放されることをカタルシスと称し、かかるカタルシスの徳を有する少数者がときどき神とまじり合一するコウツツ忘我の心境をエクスタシス (Ekstasis)<sup>3)</sup>と称した。またプラトーンの「パイドーン」にはデーロス (Delos) 祭の秘儀 (ta mustéria) としてのヘレウシスの秘儀 (Elesúnia mustéria) (Elesúsis) の際のテオリーア——この意味のテオリーアとは古代ギリシャで國際祭典の神託または競技会を參觀するために諸国大使 (theotai) を派遣すること——が記せられているが、この秘儀は禁欲主義と関連をもち、古代ギリシャのこうした秘儀において神殿その他を清めることを古代ギリシャでは一般にカタルシスと称した。かくてカタルシスという語はうえのごとく道德的意義においてのみ認められ、またアリストテレース自身もその「政治學」において音楽に3種を認めたが、無害ではあるが道德と関係のないもの作用にカタルシスという称を避けた。ゆえにうえの諸事實はアリストテレースのカタルシスの道德的意義に於いての間接証拠と考へうる。

- 1) ソークラテース (Sokrates) の感化を受けた軍人・作家。
- 2) 自著、地方自治と社会事業 196頁にはピロン (フィロン) についてその認めるエクスタシスその他について論ずる。
- 3) 近代心理学ではこれを「消魂大悦」(ecstasy) と稱し、一種の異常心理と見る。神仏の姿を見、またはその声を聞くという幻覺的妄想 (hallucinatory delusions) を伴ふことが多し。
- 4) 本論文 七四頁、七五頁。



うえに論述したごとく、カタルシスには道徳的意義を認めるのほかに、超道徳的な、実存主義者の解釈はうえのごとき種種の理由で許されなことになる。しかし、すでに述べたごとく、アリストテレースが医家に生まれ、たことなどの理由でかれのいうカタルシスの意義を離れてかれのテオリアを解しえないと実存主義者たちが主張するのは正しい。それとともにかれらがこのカタルシスをノイローゼに対する一種の治療法と見るのは、アリストテレースの「政治学」(Politica, Politics)<sup>1)</sup>——原名では *Tà politiká* すなわち国務 (State-Affairs) —— 第8編第7章にこれを医療としてのカタルシスすなわち排セツ (purgation) にたとえ、詳しい説明をしている個所によって誤りない意見と考へうる。しかし論者たちがかれのカタルシスをフロイト的意義の治療法と見るのはカタルシスの道徳的意義(上述)から見て正しくない。しからばこれはいかなる意味においてうえのごとき一種の治療法であろうか。

1) ヨチン語の *politica* は「の場」*politia ars* であり、従って一種の文芸 (*ars*) たる政治学である。同じ英語の *politics* には国務 (*state-affairs*) のほか政治学 (*political science*) の意味がある。しかしギリシヤ語の *ta politiká* は国務を意味し、*he politiké* は一種の文芸 (*arkhén*) である。the science of politics である。

そもそも治療法には古来ホメオパティー (Homöopathie, homeopathy, 類似療法、同種療法) とプロパティー (Allopathie, allopathy, heteropathy, 異種療法) がある。これは症状 (徴候 *symptoms*) に関連して行われる療法であり、症状そのものに立ち向い正面からこれを攻撃するのがプロパティーであり、わが国では対症療法とも称せられる。いま一つのホメオパティーとはこの症状を排除せず、類似の症状によって症状よりも病因を治療しようとするものであり、一種の病因療法 (aetiological treatment, [Gr] *aitía = a cause*) である。このホメオパ

ティアーは近代においてはザームヘル・ハーネマン (Samuel Hahnemann) (1755—1843) が創始し、<sup>1)</sup> かれによつて “*similia similibus curantur*,” (Like cures like, 類似のものは類似のものに治つてやられる) の原則 (the principle of——) と称せられ、<sup>2)</sup> その起源は古く、西洋ではヒポクラテース (Hippokrates) (前460?—377) にさかのぼる。かれはプラトーンやアリストテレスとはほぼ同期の人であり、自然良能 (VMN = *vis medicatrix naturae*) を尊重し、<sup>2)</sup> その立場からホメオパティアーを認めたが、プラトーンもまた後述のごとく音楽の旋律のうち「行動的なもの」と「神がかり的なもの」にこのホメオパティアー的效果を認めた。

1) ハーネマンはホメオパティアーに用いられる薬品の効力について最初の人体実験を行った人として知られている。しかもかれ自身を試験台としてキナ皮 (cinchona bark) によつて健康時に間欠熱 (intermittent fever) を生ぜしめることを証明した。それはキナ皮のマラリア治療に関するカリン (Cullen) の説明を独訳中それに満足しえなかったのを動機とした。かれはウィールスを治療に用いる可能性を主張したが、この主張はワクチン注射 (vaccination) — 種痘をも含むワクチン注射 — や血清療法 (serum therapy) まで発展し、米國ソールタ博士 (Dr. Salk) のソークワクチン (the Salk vaccine) は殺したポリオウイルスである。なおホメオパティアーはいまや英米に発達し、London Homeopathic Hospital はじめの種病院多く、米國ではこれを認める完備した諸大学がある。日本ではガン治療としてのホメオパティアーに対して圧力団体的反対さえあるといわれるが、英米ではこの種研究が着着として進んでいる。

2) *phisio gar antipratoroides kenet panta* — Hippokrates (自然が反対せば万事実現しない。——H) なお古代ギリシヤでは日常における社会生活の知恵を意味する *diata* なる語が食事療法の意味に転用されるにいたつた。それはうえの自然良能の考えが、ひろく民間にも行きわたつていて食事療法が治療法というよりむしろ日常における病氣予防法として認められていたためと考えられる。英語の *diet* (食事療法) はギリシヤ語 *diata* に出づ。

かくて医聖ヒポクラテース、プラトーン——後述のごとくアリストテレスも——やガレーノス (Galenos) は医学を含む万学の基礎としての哲学——アリストテレスの場合は政治哲学——を認め、その意味でガレーノスは有名な言たる「最善の医者はまた哲学者」(áristos iátrós kai filósophos,) を残した。とは云えヒポクラテースやガレーノスの場合、医学は哲学に隸属したものでなく、ヒポクラテースは西洋において医学を一つの専門

学として哲学より独立せしめた最初の人であり、そのゆえ「医学の父」と称せられる<sup>1)</sup>。

1) ヒポクラテースの上の考えは今日もなお西洋の伝統的考えであり、英米などで M. D. の学位を受けるとき Hippocratic oath の宣誓があり、かつこの学位は日本の医博の大半の場合に見るごとく年少未経験者に与えられることもない。なおうその oath はヒポクラテースの作と伝えられる倫理綱領である。

つぎにノイローゼ (Psychoneurose, psychoneurosis) に関する治療法についていえば、ユング (Jung) には夢およびノイローゼに關し、「後向きの解釈」(retrospective interpretation) たる精神分析的解釈をとる一面あることは否定できない。この面において、かれは人間の意識的欲求で抑圧されて無意識となり心のシコリになっているものを「コンプレックス」(Komplex) と称し、このコンプレックスが夢およびノイローゼの原因であるとした。この意味のコンプレックスはフロイトなども認めたが、ユングはこのシコリを個人の体験によるものに限らず、先祖伝来のシコリをも認め、またこのシコリをフロイトのごとく性的衝動 (Geschlechtstrieb) に限らず、またアドラー (Adler) のごとく性的衝動とそれに上位する優越感 (Superiorität, 力への欲求) に限らず、道徳的情緒をも含む広い意味の欲求と見てこれを「リビドー」(Libido) と称した。

この精神分析解釈では、フロイトもユングも症状に正面から立向って攻撃する「精神指導法」(Psychagogie, Psychagogie) —— 暗示・説得・再教育のごとき —— をとってアロパティイを行なうことなく、症状を攻撃せず逆に昔の体験——抑圧された意識とこの抑圧力——を思い出させる。ただし先祖の体験の場合では、神を見る夢・劇においてそれをふたたび意識することはあっても思い出はない。かくてうえの再意識によりコンプレックスから脱せしめるが、この方法をカタルシスと呼ぶが、それは一種のホメオパティイである。

なおユングはアドラーとともに夢およびノイローゼに關し、「前向きの解釈」(prospective interpretation) を

とり、これに基づく「精神指導法」を認め、これにむしろ重点を置く。かれは「リビドー」に基づく未来の願望が、アドラーは優越感に基づく未来のそれが現在、満たされていないためのフラストレーション (Frustration, 欲求不満) による緊張が夢およびノイローゼの原因となると考える。従ってかれらはこの治療法として未来に対する適応 (Anpassung, adjustment)——社会的順応 (soziale Adaptation)——を指導する。この場合の精神療法は症状に無関係なる病因療法 (既出) であり、しかも自然治癒力を助ける。なんとすれば集団を造る本能が人類の古い大脳皮質 (cerebral cortex) に存することが大脳生理学上、最近分明的となったからである。<sup>1)</sup>

1) 人類の動物的本能が古い大脳皮質に存し、この本能と区別される理性—生後の知を取り入れる—は新しい大脳皮質に存することは以前から明らかであった。しかしこの知に加える新発見によって新しい大脳生理学はアリストテレスの能動的理性と「受動的理性」の区別 (関大法学10巻3号の自作、2頁、3頁) を連想せしめる。

しからばアリストテレスのカタルシスとは何ぞや。思うに、それは上述したユンのリビドーとしての道德的欲求のコンプレックスとなっている場合のカタルシスに当り、その意味で1種のホメオパティーである。このことは、すでに述べた理由のほかアリストテレスの「悲劇」の定義の原ギリシャ語において「諸形相」というかれの哲学的表現に関係するうえの属格がうえのごとく *khoris* を前置詞として用いられていることで疑う余地がない。なおうえの場合、抑圧する力が神を否定し、他人に對し尊大となる自らのゴウ慢 (*hyperethania*) であることがかれとほぼ同期のソポクレスの悲劇觀と前者のいうテオリアの真義 (後述) によって明らかとせられる。なおうえの場合のコンプレックスは何らかの機縁にその反射運動的結果としてゴウ慢に基づく道德的頑固を招くが、うえのカタルシスはこのシコリを排セツする。しかるに人間はいかに正善を目的とするもともとゴウ

慢であるから、かかるカタルシスはアリストテレスの道徳的指導の前提である。ところで一方かれは「倫理的優越」(ēthikē aretēh, pl. ēthikal aretai)<sup>1)</sup>の条件としての健康を主張した。従ってかれにとってカタルシスはこの意味の健康を招く1方法である。

- 1) 2) アリストテレスの「倫理的優越」については自著、英国刑事公民政治史序説(増補13版)、9頁参照。この本文の個所を執筆中、1965年9月はじめ、京都自宅の庭に百日草(zinnia)の大輪が紅もゆる美しきでおおしくも咲きそめた。この草はその年の春まったくはからちもそこに植えたものであるが、この百日草は一般に、英語では youth-and-old-age と称せられ、この今様の名称——昔は prime, bloom and age と称した人生を今では youth, prime and age としう——によって百日草は健康なる長命に思われた人生を象徴するものとせられる。

なお「ニコマコス倫理学」の冒頭には「技術」(téchne)も「科学的調査」(méthodos)も「行為」(práxis)も「意図」(proairesis)もすべてなんらかの「善」(tò agathón)をめがけている旨を記している。従ってアリストテレスは技術的法規も間接ではあるが倫理的法規が直接に目的とするものをめがけていると考えたと思う。

なおアリストテレスのカタルシスについてかれの悲劇の定義のなかには (hō) phóbos (恐怖) という語があり、(hē) eusebeia (崇敬) という語が避けられている。のちの語は英語の reverence, adoration に当り、fear and love を伴う respect (尊敬) である。従ってちぎの語がドイツ語の Schrecken に当るとすれば、この (der) Schrecken と区別される (die) Furcht あらうは (die) Ehrfurcht があとの語に近いであらう。アリストテレスが eusebeia を避け phóbos を用いたのは、人間のゴウ慢が妨げられる運命の皮肉には別述のごとき宗教的意義があるが、この悲劇を見て主人公に「同情」しその結果はじめてカタルシスを受ける観客は、一般的にいて、この宗教的意義を感じないからであり、アリストテレスがこの意義でとくに phóbos を用いたことは、かれが後述のごとく人間のテオリアが必要なることを主張したことだろうか。さればレッシン(Lessing)が

phobos に対し、従来の訳語たる Schrecken を避け Furcht の訳語を用いたのは、宗教的意義を織り込んでいて原文に正確ではないと考えられる。

以上のごとくアリストテレスのカタルシスはユンのうえのごときカタルシスに当る。しかるにユンはノイロイゼについてなお精神指導法を認めたが、これに当るものはアリストテレスも認めたと考えうる。それはテオリアであり、この意義を後に論述する。しかればアリストテレスのカタルシスとテオリアをかれがよく知っていた、プラトーンの旋律の区別たる「神がかり的なもの」<sup>1)</sup>と「倫理的なもの」<sup>2)</sup>に当てて区別した可能性が大であり、もしそうであるとすれば、うえの *daia* <sup>3)</sup>としてまたはその一種たる「治療法」(therapeia)としてカタルシスは「神がかり的なもの」(enthousiastikē)であり、テオリアは「倫理的なもの」(ethikē)であると考えうる。かくてテオリアも既述のカタルシスとともに「倫理的優越」の条件としての健康を招く方法である。

1) 2) 本論文、七五頁。

3) 本論文、七〇頁、注2)。

なおアリストテレスはうえのカタルシスに音楽的・医療効果を認めたが、音楽的なこの種のものをそれに限ったのではなかった。そしていま一つの医療的音楽もカタルシスとあい並べて重視した。すなわちかれはその「政治学」第8編第7章790において、ある哲学者たちは旋律 (to melos) <sup>1)</sup>を分類し、(1)「倫理的なもの」(to ethikōn)・(2)「行動的なもの」(to praktikōn) ならびに(3)「神がかり的なもの」(to enthousiastikōn)となしたが、これを継承するとし、このうち(2)と(3)に精神的医療的效果を認めたことは明白であり、(なお(1)にもおそらく同じ効果を認めたと見える)(3)をもってうえカタルシスに限るとした。しかるに一方プラトーンは「パイデー」に記した秘儀としてのテオリアにおける音楽旋律を「倫理的なるもの」と考え、かれの「諸法律」(Nomoi)

7:790に記するディオニュロス(Dionusos)の祭りにおける「合唱舞踏と音楽」(khoreia kai mousa)を「神がかり的なもの」となし、さらに後書同所では子もり歌を「行動的なもの」と認めた。そのばあい「神がかり的なもの」(to enthousiastikon)とは「神がかり」(enthousiasmós)を認めたのではなく、「神がかり」を異常心理と見てホメオパティイとしての旋律をこのホメオパティイの点から「神がかり的なもの」と称するのである。しからばアリストテレスは旋律に関するプラトーンのうへの分類を認めながら、「神がかり的なもの」についてはプラトーンの認めるうへの酒神祭における「合唱舞踏と音楽」を排斥するものであることは明白である。なおアリストテレスはうへの「行動的なもの」についてはうへの意味で有益ではあるが、同時に道徳的に無害であるとした。<sup>3)</sup>

- 1) 自著、正統政治学、97頁参照。
- 2) 本論文、四八頁注、六八頁。
- 3) しからばアリストテレスは喜劇についてはその旋律をいかに考えたのであろうか。そもそも古代ギリシャでは悲劇は tragōdia(tragos, a he-goat + o'dēn, a song)と呼ばれ、この語のミナモトはそこに出場した俳優がディオニュロス(Dionusos)の従者たる trigosにフン装して出場したことを意味するとも称せられるに反し、喜劇は komōidia (kōmos, a festival procession + o'dēn) と称せられ、この語源はディオニュロス祭のときの大衆の行列における社会批判的シンクロポールの歌を意味する。従ってこの喜劇の時期のうち旧喜劇(archaia k.)の時期は政治・社会風刺(political and social satires)の時代であり、アリストメネース(Aristophanes)を最高峰とする。その作「雲」(Chai Nephelai, Clouds)は、シンクロポリスを経営者たる思想作業場(Chrontistehron, phrontistery, thinking-shop)に sophists の店で新興宗教の神神たる雲を招き、正義の弁護(dikaios logos, a plea of justice)となす、不正義の弁護(adikos logos)を教える。この作で「雲」とは風(aethr, きり・かすみ・雲を含む)。(自著、正統政治学、134頁参照)をもつて万物の根源(archēn)と見た自然哲学者アナクシメネース(Anaximenes)に対する風刺である。この旧喜劇の時代については中喜劇(mēsa k.)・新喜劇(nea k.)の二期が続き、新喜劇は政治および社会に対する風刺その他の一切の直接批判を避けた時代で、この新喜劇がその後における西洋喜劇の伝統となった。アリストテレスはこの旧喜劇が新喜劇へ移る中間たる中喜劇の時代の人である。従って第一期では喜劇の政治倫理・社会倫理の意義が強調されたが、アリストテレスは、後述のごとく、テオリアにノイローゼの病因治療を認めたから、旧喜劇についてはその主張された倫理的意義を認めなかったと考えられる。ただ、かれにしても新喜劇にこに生まれていたら、この種の喜劇についてその旋律

にうえの「行動的なもの」を明白に認めていたと思える。

しからばつぎに、うえのアリストテレスのカタルシスの意義に基づきテオリアの真義を述べるに、このカタルシスの結果うえのノイローゼが除かれ、人間平等観——われもひとともに、「野獣あるいは神」(en theion, en theos)と区別される「人間」(anthropos)としてその「形相」をひとしく有するものと考えること——のもとに正善<sup>1)</sup>への努力が行なわれる。この人間平等観はうえの「ゴウ慢」(hyperphania)と区別せられる1の低姿勢ではあるが、それはむろん卑屈でもなく、また既述の „Spucke“<sup>2)</sup>でもなく。

1) アリストテレスの「正義・公平」などについては自著、英国刑事事公民政治史序説(増補13版)、216頁以下、同付録、42頁、自著、最  
高文芸としての正統政治学、29頁、58頁、59頁。

2) 本論文、五〇頁、五一頁。

かくて人はカタルシスの後うえの平等観のもと正善のためそのベストを尽すも、なお自らの「過失行為」(hamartēma, pl. hamartēmata)<sup>1)</sup>(広義)——「過失行為」(狭義)(hamartēma)と「不運」(atikhēma, pl. atikhēmata)——または他人の「不正行為」(adikēma, pl. adikēmata)<sup>2)</sup>(広義)による、内外よりの障害という、運命の皮肉たる「不運」(atikhēma)(広義)のためその目的に達しうることの少ないことを真剣に努力すればするほど自覚すること多く、その極は「手も足も折れて霜夜のギリギリ」の感に達する。これうえの道徳的フラストレーションとしてのノイローゼであるが、アリストテレスのテオリアとはこの病因の唯一の治療法であると考えうる。一方においてうえのごとき努力の結果かかるノイローゼにまで行かねばもともとゴウ慢な人間はテオリアの心境に達しない。かくて以上のごとき正善実行の努力とテオリアは車の両輪のごとく、おのおはその他を欠くことができない。



1) 2) アリストテレスは広義の「不正行為」(adikēma)にも種ありとし、「過失行為」(狹義) (hamartēma)・不運 (atikhēma) を含む「不正行為」(狹義) (adikhēma) とした(ニコマコス倫理学、第5編、第8章、1135b)。狹義の「不正行為」とは一時の激情に基づくところの、または前もって計画されたところの故意の行為。「不運」とは認識なき過失である。

アリストテレスの以上のとき過失観はローマ法上において過失 (culpa) すなわち広義のケ怠 (negligentia) が重過失 (lata culpa, crassa negligentia)・軽過失 (levis culpa)・最軽過失 (levissima culpa) に分かれた。重過失と軽過失が放ラン (luxuria) として狹義のケ怠 (negligentia) すなわち最軽過失と区別せられる。および、英法の法諺たる「ケ怠は常に不幸を友とす」(Negligentia semper habet infortunium comitem, Negligence always has misfortune for a companion) (Co. Litt. 246) を連想せよ。

なお自己および他人のおよぶ広義の「過失行為」に関して、クレチナー (Kretschmer) の質生物学 (Konstitutionelle Biologie) の「わゆる」質 (Konstitution) を考慮に入れるときは、かかる過失をなるべく避けるための健康保持の必要が大いに感ぜられる。[また四柱推命(別述)的(アインシュウ)は非科学的の背理であるが、うえの「質」に基づく相性には科学的の合理性がある。]

しからばつぎにアリストテレスのテオオリアの真義は何であろうか。このテオオリアをもってうえのごとく神のなす静観と主張する通説の典故はアリストテレスの「第1哲学」および「ニコマコス倫理学」である。しかるにこの「第1哲学」は断片的で草稿のようであること、アリストテレスの講演はその弟子たちに対する高級のものも既述のごとくかれのいう「口授講演」であったことから見て、多くの人によってかれの著述と考えられているものの大部分はこの「口授講演」を後世に弟子が編集したものであり、少くともこの「第1哲学」がこの種の編集物であることは「ニコマコス倫理学」、「エウデーモス倫理学」、「大倫理学」と変らないと考える。しかも「ニコマコス倫理学」(ēthikā Nikomākheia) はアリストテレスの子ニコマコス (Nikomakhos)<sup>3)</sup> が編集し、父の死後公刊したものであり、「エウデーモス倫理学」(ē. Eudēmnia) はアリストテレスの弟子エウデーモス (Eudemos) が「ニコマコス倫理学」の誤りを修正しようとしたものであり、「大倫理学」(ē. megala) はうえの2種の「倫理学」の抜粋である。この「エウデーモス倫理学」は「ニコマコス倫理学」の上述第10編

——神の静観としてのテオリアを記述する——を削除しているし、「大倫理学」は「自らを直観する直観」(no-  
êhis noûsês) の観念は不条理であるとし、神がテオリア(無我の心境を静観すること)を行なうとすると「自  
ら<sup>4)</sup>を直観する直観」であるから神にはテオリアはありえず、人間にありうるテオリアは他者たる神の心境を  
静観することであると認めている。

- 1) この書に「形而上学」(ta meta ta phusika) と言う名を付けるものがあるが、後述のごとく、この書名はふざけくはない。
- 2) 本論文 四八頁注、五四頁頁。
- 3) アリストテレスの父たる名匠ニコマコスの名を継ぐ。
- 4) 直観については本論文、六六頁、注、七九頁、注の最終節。

しからばアリストテレス関係の以上の古典の間にテオリアの説明につきうえのごとき矛盾あるをいかに取  
り扱うべきか。思うにカタルシスの意義を近代心理学の発達を背景にうえのごとく解するときは、以上の文献学  
的考慮とともに「大倫理学」の記述に従うのが妥当であると思う。しからばテオリアは創造主たる唯一神の無  
条件的救いに対する絶対帰依を意味し、この信仰と社会における正善への努力とは既述のごとく車の両輪の關係  
にあると考える<sup>1)</sup>。

- 1) しからばこの義のテオリアは換言すればアリストテレスの「受動的静観」(nous pathētikos) のうち「テオリア的精神」(nois  
theōretikós) の働きのあり、精神の一種の apodektikē hexis (a receiving state of body or mind) πρᾶξις (比較) apodektēn =  
receivable: apodektikēn || adi. to be demonstrated. 神々々々アリストテレスの「創造者」(能動者 to poietikon) には、自善のあり  
す(πρᾶξις) 神の行なう直観と解するなど種々の解釈あるが、かれ自身はこれを神の創造力の意味に用い(自善、正統政治学、17頁、18頁)。  
「受動的静観」(nous pathētikos) とはブレントアノ(Brentano) の認める「ごく被造物たる人間の理性ときほり断定しえないにして  
も人間の精神たる」ことは事実であり、これを人間の理性と見てこの理性のうち「エピステーメ的なるもの」(to epistēmōnikon) || 「テオ  
リアの理性」(n. theoretikos) と「行為的理性」(n. praktikos, logos praktikos) のを認む、「エピステーメ的なるもの」の働きたる直

観知をテオリアと称するものもあるが、アリストテレス自身は「受動的ヌース」のうちうへの「テオリア的精神」——この場合、ヌースは精神と訳すべく、理性と訳してはならぬ——と「行為的理性」のを認め、なおこの「行為的理性」の働きたる知が「ドクサ」(doxa, 俗見)に於ける「エピステーメ」(epistēmē, 真知)であり、「エピステーメ」とは「感覚」(aisthēsis)が残って生じた動物的な「想念」(phantasia)に「行為的理性」の加わったものである。「行為的動物的な「欲情」(orexis)にこの理性の加わったものが「意思」(boulēsis)であり、この「エピステーメ」の結果として存在せしむる「文藝」(学問・芸術、technē, pōiētechnai)であり、「文藝」は「哲學」(愛知、philosophia)と「創作」(芸術的創造、artistic creation, poiein)より成る。

この「哲學」は「第一哲學」(prōtē ph.)と第二哲學 (deutera ph.)より成るが、この「第一哲學」は、テオリアのうえの真義より考へるに於て、①シテウヘーネー (Schwegler) がこの「第一哲學」をアリストテレスの形式論理学とを分離する通説がかれの精神に反するを主張した、② (Geschichte der Philosophie im Urniss, Kap. XVII) とか③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿) にかかれの形式論理学について英国の大法官フランシス・メンタン (Francis Bacon) がそれは演ヒキ法を代表する三段論法より帰納法に重点を置くを解して、中世のアリストテレスのスコラ哲学の曲解を正し、アリストテレスの形式論理学の著書の後世的総称「オルガノン」(Organon)にちなんだ「新オルガノン」(Novum Organum)と称する著書を残した場合の新解釈の通りに賛成せざるをえなむ。しかるに一方、うへの「第二哲學」は「自然学」(phusikā, phusikēh akroōsis, マクローアリス)と呼ばれ、道德に関する学を含む。しかるにアリストテレスの形式論理学は「哲学」のなかに含まれ、「第一哲學」・「第二哲學」の基礎であり、「第一哲學」は「第一形相」(prōton eidos) (第一原因)を取り扱う意味で第一であるが、テオリアの真義から考へて一種の「仮説」(hypothesis)であるを解すべきである。それは、ロコス (Rhodos) のアンドゥロニコス (Andronikos) がアリストテレスの遺稿の編集に当り、故人がその教授に際して「第二哲學」を講じたのも「第一哲學」すなわち「神学」(theologikēh)を講じたも順序に基いて「第一哲學」を「自然諸物のもの諸物」(τῶν φυσικῶν) (τόν μετὰ τὰ φυσικά, Of the [Things] after the Natural [Things])と称したが、アリストテレスの教授上の順序こそ「第一哲學」が仮説たることを示すものである。しかるにアリストテレスの「第一哲學」を誤って形而上学 (metaphysics)であると主張するものはアンドゥロニコスの前掲書名の最初の冠語を誤り記した μετὰ τὰ φυσικά と記し、μετὰ (前置詞) にアインドゥロニコスの用いた意味のほか「以上」(super)、「以外」の意味があるから τὰ μετὰ τὰ φυσικά を「物理以上の学」=「形而上学」の意味と考へ、μετὰ μετὰ φυσικά = metaphysics を「形而上学」の意味に用いるに至った。

この「創作」は「創作術」(広義の poietikēh) とも言われ、「創作術」とは建築などの造形芸術や「作詩術」(mousikēh, 狭義の poietikēh) を含む芸術一般である。(この広義の poietikēh を尊重す意味で シュロン (Schelling) は Poesie (ポエジー) を主張して Kunst と区別した。)

かくてアリストテレスにとって、「エピステーメ」——俗見に對する真知——は経験主義的な学問・芸術であったが、プラトーンにとってこの意味の「エピステーメ」はかかる文芸ではなく、感覚 (aisthēsis) と無関係な「ノエーシス」(noēsis, 直観) であった。

なおテオリーアのうえの意味に関する傍証はインド仏教の用語たる混成サンスクリット語 (Hybrid Sanskrit) の *avalokita* [m] の意義である。上述のごとくうえのテオリーアには①観ることと②うえのごとき絶対帰依の2義がある。しかるにこの混成サンスクリット語にもまたこの2義がそなわっている。すなわちこの語は古典語の同字と同じく、*avalokayati* という動詞の名詞形であるとともにこの動詞の意味する *to look at* (観る) *to survey* (見渡す) を名詞形にしたものである。それとともにこの混成語動詞 *avalokayati* はバリー語動詞 *apalokei* と同じく *to ask permission of*…… (…のゆるしを求めぬ) という意味をも有し、従ってうえの混成語名詞もこれと同じ意味を持っている。なおうえの *avalokita* (中) が形容詞 *avalokita* として用いられるときは「観られたる (所観)」または「ゆるしを求められたる」の義となり、この形容詞と名詞 *īvara* (自在なるもの) との結合たる *Avalokitevara* (所観自在天、ゆるしを求められた自在天、観自在) は *Vipasvin* (*Vipaṣvin*) 仏のとき世界を創造したと信ぜられ<sup>3)</sup> *padmapāni* と<sup>4)</sup> *vajrapāni* たる *gṇadhīpa* とともに世を救うと考えられた。しからばうえの混成サンスクリット名詞 *avalokita* はプリストテレースのテオリーアと同じく①観ることと②うえのごとき絶対帰依の2義を有することとなり、この語を「観」と漢訳するも、それは聖道門にて用うる *vipaṣyana* (観、*An-schaung*) と混同してはならぬ。

1) 仏教文書—教典を含む—は最初は Prakrit にて後には Hybrid Sanskrit にて書かれた。Prakrit は Pali (Maṅghali, P. ガダ語) その他の方言を指し、アンヨーカ王法勅は方言たるプラクリットで書かれている。混成サンスクリットとはプラクリットを古典サンスクリットに混じ、それに文語の語尾変化を持たしたものである。

2) アッサムその他の地方の方言では *avalokita + svara* (E. sound) の場合 *svara* は音便上 *īsvara* となり、従って *Avalokitesvara* (所観音) が成立し、これがさうして *Avalokitevara* に転じたとの説があるが、*Avalokitevara* に於ける「観られた音」の意をも兼ねているかも知れぬ。

3) Dr. E. J. Thomas, History of Buddhist Thought, p. 191.

4) 自著『正統政治学』扉の次丁裏、さし絵。

5) 前掲自著、ii頁。なお古代中国では仏寺を方外(ホウガイ)の所(sanctuary)とし、王法不入の地としたとき *ganadhipa* の訳語の「仁王」を「仁王」にかえ、原語の意味を捨て去り、寺門の番兵として従来のア・ウンの2匹のコマ犬に代わるア・ウンの2人の金剛力士(*varipada*)と考えた。なお「仁王」を法意(*Dharmamasas*)、法念(*Dharmasmiti, smiti*、即ち) 両太子の本地と解するときは「王法為本、信心為本」の考とかならずしも衝突しない。

ただしアリストテレスの思想にインド思想が影響しているかどうかは今日いまだ不明であるが、もしサーンクヤ哲学がピュータゴラスに影響を与えたとの説が正しければ、このインド哲学も他力信仰の仏教もインド人の口授にてピュータゴラスまたはアリストテレスのテオリアの考えに影響を与えた可能性は大いに増して来る。しかしかくのごときインド仏教の影響がいまだ証明せられるにいたらなくとも、*Avalokita* とテオリアとのうえのごとき一致はこのテオリアの意義の傍証となるには十分であろう。<sup>1)</sup>

1) なお東大教授中村元(はじめ)文博士の説によれば、アリストテレスの思想はインドに影響を与えていない、もしそうだとするとそのすぐれた形式論理学がインドに入らねばならぬ、しかるにインドの因明(*Dehavya*)すなわち形式論理学はその発達きわめておそい、ゆえにアリストテレスの説はインドに影響を与えていないとせられる(中村博士、インド思想とギリシャ思想との交流)。しかしわたくしは思うにアリストテレスの説は直ちに影響を与えていないが、後にアポロロを通じてかれの政治思想がインド仏教に護國(*tristrapala*)の思想をよみがえらせたと考ええる。

最後に、うえのテオリアはアフニエンアトン(*Iran-Jin*)王のアトンへのうえのごとき絶対帰依を連想せしめる。古代エジプトのこの王は「神神」(*nrtw*)<sup>2)</sup>と言う語の使用を禁じ、唯一の神(*ntr, ネチュル*)アトン(*Aten*)<sup>3)</sup>への絶対帰依を教えるとともに、われわれはアトンの廣大無辺なる「恵み」(*im*)のもと人間としてその本性に従う「恵み」と「正義」(*ntr, ネテル*)を行わねばならぬと示した。しかるに一方、アレクサンドロスのエ

ジプト征服のち10年間プトレマイオスを通じてエジプトの文化に接したアリストテレースはアマルナ芸術を主たる機会因としてアフエンアトン王の信仰を知り、その影響を受けたと思われる。それは天親菩薩 (Yasubandhu) がヘレニズム芸術を主たる機縁としてうえのテオリアとアヴァローキタを知り、その結果「アポロ<sup>5)</sup>」の出現となったことに共通するところ大なるものがあろう。

- 1) 自著、正統政治学、第4章。
- 2) エジプト象形文字を象形文字として用いるときマサカリ (E) (C) または神の絵文字をそれぞれ3つ連ねて用いる。
- 3) このアトンは従来の神神の「とく奇怪な動物の姿を本体とし、自然現象を化身とするものでなく、アトン (E) (E) — 太陽円盤 — とその輝き (E) がその広大な「恵み」(E) のあらわれ (manifestation) たるものである。なおアトン神については自著、正統政治学、77頁参照。
- 4) 自著、正統政治学、90頁。
- 5) 自著、前掲書、さしえ (アポロ<sup>5)</sup>) の説明。

うえのアマルナ芸術について見るに、エジプト第18王朝のはじめから、「マアト」(m<sup>4</sup>t, maat)<sup>1)</sup>の尊重からの芸術上の写実主義が、新エジプト語とともに、現われ、これはアフエンアトン王の宗教改革によっていっそう強化され、王の始めた新都の現代名テルヘルニアマルナ (Tell-el-Amarna) に従ってこの写実主義をアマルナ芸術という。この芸術とうえの新エジプト語はアフエンアトン王の死後、そこに宗教的、政治的反動<sup>2)</sup>の大なるものがあつたにかかわらず、なおながく強い影響を示した。<sup>3)</sup>

- 1) 「マア」(m<sup>4</sup>, ma, 見る) から出た語、見ることを中心とする感覚による真理。またこの語から出た名のマート女神 (M<sup>4</sup>t, Maat) は物理的法則と倫理的法則をつかさどり、ラーの化身なる西方浄土の主たるオシリスの娘であり、オシリスの法廷において「マアト」と「正義」(Dj) を執行する。マート女神はギリシャのテミス女神に対比せられる。
- 2) 自著、正統政治学、81頁。なおトウトリアンフリアモン王はまたネブヘルウラー (Nub-ptw-R) とも称せられた。このまたの名は諸創造の主、太陽神の義であると考える。なお墓主と同形のつくりにはサワブティ (Sawabti) とウシヤブティ (wshabti, ushabti, answeret) とあるが、王のシャワブティは神的性格を持ち、アマルナ芸術風である。
- 3) このことは昭和40年秋10月22日、京都におけるツタンカーメン展を見ていっそうその感を強めた。